

大人の責任

今の社会・学校には「不」が蔓延していると感じる。不安・不平・不満・不快・不信・・・・
「不」とは、このように人が人に抱く「否定」の気持ちである。

たとえば・・・・・・社会・家庭・学校で生徒がマナー違反をしている場面に遭遇しても
「不」を抱く大人は何も言葉を掛けない。

「どうせ、あの子に言ったところで聴く耳を持たないだろう」

「どうせ、口答えするからうっとうしい」

と子供を「否定」して受け入れようとしないのだ。言葉を掛けられなかった子供は、自分の存在を「否定」された寂しさを感じる。そして、「どうせ私はダメなんだ」「私なんてどうなっても構わない」とすねたり、いじけたりしてしまう。子供のそんな態度は大人に対する「不信感」の表れだ。このようにして「不」は蔓延していく。反発する子供も大人からの声掛けを待ち、受け入れてほしいと思っているはずだ。

子供の感性は、私たち大人が考えている以上に鋭いものだ。「不」を持って接してくる大人には決して心を開こうとしない。しかし反対に、「私は君をちゃんと見ている」「こんなことをするのは、君のためにならない」という愛情を持って接する大人には、子供は必ず何かを感じ取って心を開く。大人が、教師が、社会が、子供に対する「不」を払拭すべきなのである。

そして 「この子供はこんな風に成長すればいいな」

「多くの人から愛される人間になって欲しい」

と本気でその子供の、3年後・5年後・10年後の将来を見通して指導に当たれば、子供にも必ず変化が見られるだろう。

子供は大人の背中を見て育つと言われる。

よく 「最近の子供は心が貧しい」

「いまだきの子供は自己中心的で忍耐力がない」

という批判の声を聞くが、こうした生徒たちを育ててきたのは誰なのか。まず問われなければならないのは、我々大人の姿勢である。

子供たちに今必要なのは、

きちんと正面から向き合ってくれる大人であり、

信念を持って叱ってくれる大人である。